

元駐加大使

吉沢清次郎氏を偲ぶ

近藤 晋一

四月二日午後四時半、三田の済生会中央病院において、吉沢清次郎さんは、安らかに眠るが如く、八十五才の生涯を終わられた。

逝去される前夜、敬虔なカトリック教徒であった吉沢さんは、次女の芦田百合子さんに対して、もう自分は長いお祈りができなくなったと云われた由であるが、恐らく吉沢さん御自身、その体力の限界を知っておられたのかも知れない。

私が初めて吉沢さんにお目にかかったのは、一九三六年三月である。吉沢さんは、在米日本大使館の参事官をしておられた。外務省に入ったばかりの私が、最初の海外勤務地であったワシントンに赴任した時のことである。当時大使館の若い同輩と共に、吉沢さんのお宅でしばしば御馳走になり、酒を飲んで勝手な議論をして、吉沢御夫妻に大変御迷惑をかけたものである。その頃、われわれは大使館の上司に色々な仇名をつけていたが、人格円満、温厚な吉沢参事官だけは、仇名のつけようがなかったことを想い出す。

吉沢さんは一八九四年長野県松本市で出生された。日清戦争開始の前の年のこ

とである。吉沢さんは少年時代から非常な秀才で、一高、東大と進み、法学部経済学科在学中、一番で外交官試験に合格して、一九一七年外務省に入られた。それは第一次世界大戦の最中の頃である。

一九五八年駐インド大使を最後に外務省を退官されるまでの約四十年に及ぶ吉沢さんの外交官生活において、英国、中国、



故吉沢氏

ドイツ、イタリア、米国、カナダ、インドなどに在勤し、また本省においては、アメリカ局長や外務事務次官などの要職を勤められた。その外交界における御功績をここで紹介するいとまはないが、一九六五年、勲一等瑞宝章を授けられたことを付言するにとどめる。

吉沢さんの外交官としての信条は、国家関係においても個人関係においても、

相互信頼関係を構築するために誠心誠意をつくすということにあった。吉沢さんが特命全権公使としてカナダに在勤中、不幸にして太平洋戦争勃発のため、日本とカナダは戦争状態に入ったが、このことは吉沢さんにとって痛恨の出来事であったに違いない。

吉沢さんをはじめ、公使館の館員、家族は引揚げのため、一九四二年五月八日、オタワを汽車で出発した。トロント駅に到着した時、オタワから電話がかかっているとのこと、吉沢さんが電話口に出ると、相手はマッケンジー・キング首相であった。キング首相は、カナダと日本は不幸にして戦争状態に入ったが、平和が訪れた時、再び親しい友人として会いましょう、と別離の言葉を述べられたとのことである。このキング首相の言葉は、日本の外交使節としての吉沢さんの日頃の真摯な態度に対する饒けであったのではないだろうか。

開戦以来引揚げまで約六ヶ月間、吉沢さんと御家族は公使公邸で抑留生活を送られたが、カナダ政府の取扱い振りは極めて寛大であったとのことである。勿論自由に外出はできなかったにせよ、M.P.の付き添いで医者にも行けたし、教会にも通えたり、またお子さん方が友達に電話するのも自由であったと、吉沢夫人は語っておられる。

吉沢さんは、日加協会が戦後一九五二年に再建されると、直ちにその会員となり、協会の諸活動に積極的に参画された。そして、会長徳川家正氏（初代のカナダ公使）が死去された後、一九六二年にその後を引継がれ、十二年間日加協会の会

長として日加両国民間の友好親善の促進に努められた。

吉沢さんは、一九六一年、ディーフェンベーカー・カナダ首相の日本公式訪問の折り、その接待委員長を勤められ、また一九六七年モントリオール市での万国博覧会の時、日加協会の主催した訪加親善使節の団長として、団員三十二名を率いてカナダ各地を訪問された。これは吉沢さんにとり、最後のカナダ訪問となった。吉沢さんは健康上の理由で、一九七四年、会長を辞められたが、協会の色々な会合にはよく杖をつき年々夫人と共に出席されて、カナダの人々との交友に努められていた。昨年胃の手術をされてからめっきり体力が弱り、昨年十二月に行われた協会の戦後再建二十五周年祝賀晩餐会にも出席していただけなかったが、いつも協会の運営についてわれわれに助言していただいていたものである。

吉沢さんは一九二二年結婚され、勝子夫人との間に二男二女を授かり、幸福な家庭を築かれた。現在お孫さんが十人おられると伺っている。吉沢さんはフランス・スコ・ザビエルの四百年祭が行われた一九四九年の秋、イグナチオ教会でオーストラリアより来日されていたギルロイ大司教（後のローマの枢機卿）によって洗礼を受けられた。四月六日東京カテドラル聖マリア大聖堂での御葬儀を司式された浜尾司教が述べられた如く、吉沢さんの肉体は地上から消えても、吉沢さんの信仰、思想、人格は、吉沢さんの御遺族と友人の心の中に生きつづけることであろう。（日加協会会長・元駐加大使）